

昭和34年3月卒業

第29期

昭和32年秋季～33年夏季



チーム紹介

闘志激しくなる

“柄がよい”ことは“線の細かい”チームに通じるのか、これまで土壇場の勝負で試合を失う場合が多かったようだ。能高がAクラスに返り咲くにはなによりもこの精神的なモロさから立ち直ることにあるとは一致した見方だ。このため、ことはコーチ陣も30歳前の若い先輩ばかりで固め、バリバリ気合いを入れて練習してきた。その効果があって春には問題にされなかった能高も練習試合では秋高、東奥義塾などのAクラスを破るほどになった。

投手陣は田辺、谷内、坂本と3人だが田辺はからだの故障で本格的な練習をしておらず、坂本はまだ1年生で経験不足、頼るのは谷内一人だけだ。5尺9寸の身長からのカーブ、ドロップがあり、シュートに新工夫あれば威力をみせる。これを受ける捕手伊藤は能代一中時代から谷内の女房役で気はピッタリ、チームをガッチリ握り、リードオフマンだ。

内野は二塁の主将宮腰瑞が左右をよくしめて、これという穴も見当らぬ。外野も3年生を主力にまずまず。いま当っているのは両伊藤に谷内の3人で春以来14回の試合で確実に打ってきた。これに大物打ちの田辺が回復すれば上位打線は点をたたき出せよう。あとは大会までに下位打者が調子付いてくれれば目算どおりというところ。仕上げにはいった同チームにほしいのは、もっと抜け目のない試合運びである。

◎昭和32年

・市内リーグ（9月）

能代4－3能代商

能代3－5能代工

◎昭和33年

・春季県北

能代8－1花岡工

能代9－1花輪

決 勝 能代0－5能代工

・能代選抜

能代1－2大曲

・第40回全県大会

（5年ごとに各県1校甲子園へ）

能代4－2五城目

能代0－5秋田

能 代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
秋 田	0	1	0	0	0	1	0	3	×	5

（能代）谷内－伊藤（紀美）

（秋田）渡部－高橋

〈部長〉小笠原恒太郎

〈監督〉相澤 東一・松谷 儀朗

〈部員〉3年生

◎宮腰 瑞夫

鈴木（宮腰）正弘

伊藤紀久夫

伊藤紀美男

田 辺 修

谷 内 弘

田 口 由巳

塚 本 正秋

想 い 出

主将 宮 腰 瑞 夫

○石川真良さん

忘れてならない人がいる。確か昭和33年の春先だったと思うが、グラウンドに中高年ながらがっちりした体格で、極めて紳士然とした野球指導者が来られた。いろいろな角度から当校の選手にアドバイスしてくれましたが、私はノーステップ打法を教示していただいた。握りしめたバットを顔の位置より前に置き、ピッチャーの投球フォームに合わせながら右肩の方に引き、ステップ無しでボールを打つという短打技法であった。

石川さんは若美町出身で、秋田高→慶大へ進み、明治44年に米国へ遠征したり大正元年にはノーヒットノーランを記録したり大学野球で大活躍した方であった。大学を出てから阪神電鉄へ入社し、甲子園球場の建設に際しあの「甲子園の土」づくりに心血を注ぎ、全国高等野球大会の役員・審判員を務められた。現在、若美町中央公園球場の横に記念碑が建てられている。

○佐々木吉郎投手から2打点

それは対秋商戦3回表の打撃だった。伊藤(美)がセンター前ヒット、田中のバントが野選となり、浅野は送りバントを決め1死二・三塁の好機に私へのサインはスクイズだった。

ところが佐々木(吉)はそれを読んで山なりの遅いボールを投げ、一・三塁手とともにホームベースへ駆け込んできたので、私は咄嗟に一・二塁間の空いたところへ小フライのプッシュバントを打ち、これが見事に決まり2点先取した。快哉。

後年、佐々木(吉)はプロ野球大洋ホエールズに入団し、昭和41年5月対広島戦でパーフェクトゲームという大記録を打ち立てた投手である。彼の活躍振りがスポーツ新聞を賑わす度に、あの日のシーズンが頭をよぎ「快哉！」と心の中に叫んだものである。

(昭和32年6月23日 能代市営球場)

○驚異の7打数5安打

弘前への遠征試合だった。合浦公園の中にある球場で東奥義塾高と対戦し5対0で勝ったゲームであったが、この日は何故か体調が頗る良く4打数3安打。

特に、相手の葛西(博)投手のボールが手許で停止したかのように見え、レフト方向に3本のヒットが出た。正に「目からうろこが落ちた」どころか、「動くボールの縫い目が見えた」初めての感覚に気を良くした。

このように流体物と対峙し、瞬間的に停止状態を見たことは最初であり二度と起きなかった。

続く第2戦は弘前高と7回戦(多分、帰能時間との関係)だったが、センターとライト方向に2安打し好調が持続されていた。

結果として7打数5安打と大当たりしたうえ2連勝し思い出深いゲームとなった。

(昭和33年6月8日 弘前市営球場および弘前商高練習場)

○野球ライフ最終戦

全国大会秋田県予選は参加高校26。第40回を記念し1県1校が甲子園へ出場でき、高校球児としては願ってもない大会となった。しかし、雨天に見舞われ悪コンディションの大会でもあった。

初戦は対五城目高戦であったが、伊藤(久)・塚本(英)の二塁打等で4点を取り、5回裏本校が2死三塁の時に降雨激しくコールドゲームとなり4対2で第1戦を突破した。グラウンドコンディションは最悪となり、あたかも砂漠を急遽造成したような状況であった。

(昭和33年7月22日 八橋球場)

第二戦は予定より7日遅れ(多分台風襲来かな?)で横手工業を破った秋田高と対戦した。

同校の渡部投手は長身でしかも八橋のマウンドに立つとさらに大きく感じ、10個の三振を奪われたが、7回裏に我ながら驚くほどに力の入ったバッティングで、センター右へ大飛球(先輩の言ではあと1mぐらいでスタンドイン)を打てたことが最終戦の思い出となった。

なお、8回には雨足が一段と強くなり、一時中止したが、再開後は非常にコンディションが悪化し、0対5で敗れた。

夏合宿の暑さに耐え、冬季練習に切磋琢磨したにもかかわらず、全県大会で降雨試合が多く、好天のもとすっきり気分でゲーム展開したかったことがチームメイトの感想であった。

(昭和33年7月31日 八橋球場)

野球部の思い出

伊 藤 紀美男

創立80周年記念にあたり私どもが在籍した昭和31年から3年間の野球部の様子を紹介します。3年の間、毎年監督が交代し、1年次(昭和31年)は故鈴木音安監督、2年次(昭和32年)は故相澤東一監督、3年次(昭和33年)は故松谷儀朗監督でした。能代中学、能代南高校、能代高校と30年近くも続く硬式野球部でありながら、この監督交代劇には異変を感じたものでした。

昭和33年は全国高等学校野球選手権大会が第40回になることを記念して奥羽大会がなく、秋

田県で優勝すれば即甲子園へ出場できるということで、各チームとも大いに燃えたものです。我が能高硬式野球部もこの機会を逃してはならずと練習に練習を重ねましたが2回戦で秋田高校とあたり、0対5で敗戦してしまいました。

在京の野球部先輩の腰山実政氏(第2期生)が能高野球部の健闘を願って「在京松陵会」に呼びかけ、多額の寄付を集め、檄文を添えてカツを入れてくださったのも私たち3年生の時でした。1県1校の出場の好機を逃した母校チームに対する情けなさが募金を集めるという行為になったものと察しておりました。

その後5年ごとに記念大会として各県1校の出場となり、60回大会からはすべて、各県1校の出場となり、その年、母校が高松投手を擁して3回目の甲子園出場となったのです。

数年間、コーチとして太田監督の下で母校チームを支援してこれたのが、私のささやかな誇りとなっております。

能代高校硬式野球部の5度目の甲子園出場を期待しております。



夏季合宿(於 万町)
宮腰(瑞)・奈良・小玉・塚本(英)
田中・塚本(正)・江坂(功)・伊藤久



塚本正秋 宮腰瑞夫 伊藤紀美男 田口由巳
伊藤紀久夫 鈴木(宮腰)正弘 田辺 修 谷内 弘

昭和35年3月卒業

第30期

昭和33年秋季～34年夏季



チーム紹介

攻守に奮起を

ここ2、3年能代高は低迷を続け、往年のうまみのある野球を忘れたようだ。投手の坂本は外角低めにカーブ、ドロップをきめ、クセのあるシュートとまぜて繊細なピッチングをみせるが、完投に無理がある。しかも控えがなく、投手陣は手薄。

内野守備は2年生で固めているが三遊間が弱く、また外野は主将右翼の江坂はじめ小玉、奈良と3年生だが、江坂、小玉が足を痛めて不調。

一方、打撃は江坂、坂本、小玉ぐらいがたより。能代選抜で秋田の金沢に無安打に完封された。チャンスをものにする一発の長打がほしい。

◎昭和33年

・秋季県北

能代0－2花岡工

◎昭和34年

・春季県北

能代5－3十和田

能代2－6大館鳳鳴

・能代選抜

能代0－7秋田

・全県大会

能代1－3横手工

横手工	0	0	0	0	1	1	1	0	0	3
能代	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1

(能代) 坂本－柴田

○西奥羽大会(秋田・山形)が始まる。昭和47年まで。

○以前は奥羽大会(秋田・青森・岩手)

○昭和49～52年 奥羽大会(秋田・青森)

○昭和53年から県1校

〈部長〉小笠原恒太郎

〈監督〉松谷 儀朗

〈部員〉3年生

◎秋山(江坂)功

小玉 忠勝

柴田 正夫

針金 英男

想 い 出

柴 田 正 夫

昭和32年栄えある能代高校に入り、入学と同じに伝統ある硬式野球部に入部することが出来、3年間過ごしたことを誇りに思っている。

入部した頃は、仲間も12人程おりましたが、次々と退部し、1学期が終わった時点で半分にも満たない5人となっていた。

仲間がいなくなったことで、練習前の準備、それに終わった後のグラウンド整備等練習以上に苦勞を強いられた。

監督さんからは、お前ら5人は絶対やめるなよと釘をさされ、必ず後にああやって良かったと思う時が来るとハッパを掛けられ、監督さんに言われた言葉を5人は心の糧として、日々のつらい練習も乗り越え頑張ってきたのであるが、3年生の春に1人欠け4人となってしまった。

チームは2年生が主体となっていた。2年生に負けてなるものかと積極的に監督に自分をアピールしながら多少の怪我は監督さんや部長さんに知られないよう足を引き摺りながらも練習に励んだ。

グラウンドのバックネット裏には松林の土手があり、樽子山の野球好きな観衆が日々6、7名おりいつも声を掛けてくれた。

応援してくれる地域の方々のためにも自分の不注意な怪我などで練習を休むことは出来なかった。

そんな或る日、2日後に青森高校と市営球場で練習試合が行われることになっていた。

いつも通り練習の締めくくりはシートノックである。捕手であった私へのノックは一番最後である。空は薄暗く星がではじめていた。

カーンという音と共にボールは夜空に高く舞い上がり、星とボールが交叉し、目を凝らしながらボールを捜した。あと思った瞬間右目にボールが当り病院に担ぎ込まれた。

翌日監督さんと部長さんから休めと言われたが明日は試合がある。

休むとせっかく手に入れたポジションをとられてしまうと思い、目の腫れと痛みをこらえ練習に参加した。しかし左目だけでは今ひとつ感覚をとらえきれなかった。

試合当日は、昨日よりも腫れが引けていたので眼帯をはずし、監督さんをお願いし試合に出してもらった事もあった。

3年生の少ない若いチームの所為で負けと言われるのがほんとうにくやしかった。

自分の青春をかけた野球、監督さんの言葉を信じて一歩でも甲子園に近づこうと必死で戦った最後の夏、その夢もたたれ、勝てなかった自分達の技量に涙した事が能代高校野球部の一番の青春の思い出として、60歳を過ぎた今心の片隅に残っている。



昭和33年 能代記念グラウンドにて